熱帯昼

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　実琴

「……あいつ」

ぽそりと、心なしか白髪が増えた頭をポリポリと掻きながら大我は溜息と共に呟いた。冷蔵庫に残された冷麺を取りだし、一本だけ食べる。さすがに昨晩ゆでたばかりなため変な味はしない。冷蔵庫に入れたままだったから、いくら真夏日が続く昨今と言えども腹は壊さないだろう。隣のタッパーの中身を麺の上へひっくり返し、市販の汁と少しの水をかけた。

普段の不摂生が溜まりに溜まった結果だろうか。これを残した同居人はこの時期、夏バテする。それはもう毎年のように。

大我自身、所属している職場を考えれば無理もないとは思う。納得は別としたうえでの理解だ。だからこそ食事ぐらいはマトモに採ってほしいものだが……一筋縄ではいかないのが毎年のことである。結果として敗北したような気分に陥るのは大我としても少々気がよろしくない。

ただ、同居人がわざとしていないことも大我はよく知っている。昨晩だって残そうと思って残した訳ではなく、疲労から家に入った途端に気が抜けてすぐ寝落ちてしまったのだろう。長い手足をだらりとソファから投げ出して眠っている姿はどうにも滑稽だ。

「おい、オラ起きろ」

「ぐえ」

ぐいっと勢いよく腕を引っ張り上げる。こんな所で寝てしまっては疲れも取れやしないだろうに。そういえば、と自身の現役時代を思い出しては口をつぐんでしまうのだが。

兎にも角にもまずは飯を食わせなければならない。平たい腹に手をやり、脇腹をギュッと抓る。大我の細い節くれだった指がそこまで柔くない腹に沈み込んだ。

「ぃだだだ！なに、なん、えっ、わ、たいがさん」

痛みに顔を顰め、イラついたように瞼を開ける。その犯人が大我だとわかれば、すぐにバツの悪そうな下がり眉になる。どうにもこの様子だとなぜ抓られたのか、思い当たる節はあるようだ。むしろ無かったらいよいよ拳骨ものだ、コノヤロウ。

「味薄めてっから起き抜けでも食えるだろ」

「あ、はい、すみません……」

大我の同居人……永夢がもぞもぞと体を起こし、大きな欠伸をひとつ。未だ寝ぼけたように口をむにゃむにゃしながらそのまま箸に手を伸ばした。すると、がっと勢いよく頬を引っ掴まれ、そのままぐりん、と強引に大我の方へ向かせた。ぽけ、と目を真ん丸にする永夢に、多少無理な体勢をさせている自覚はある。止めるつもりは毛頭ない。捻ったほうが目も覚めるだろうと、判断したからだ。

「歯ァ磨いてからだ。ついでに顔洗ってすっきりしてこい」

「……ぁい」

飯食う余裕も、着替える余裕もなくソファに寝そべっていたのだ。風呂はおろか、歯磨きすらしていないことは明白だった。残念ながら大我は、それを見過ごせるような人間ではない。

ピンポン。インターホンが来客を知らせる。

なんだ、もうきたのか。昼過ぎに来るんじゃねぇのか。十時過ぎだぞ。というより、なぜわざわざそれを鳴らすのか。

想定していた時間より随分早い来訪。多少の面倒くささが勝ち、インターホンの返事をせずそのまま玄関へ向かっているとインターホンが連打された。気づいてないと、判断されたのだろう。応答していないのだから当然のことだが、あまりにも煩い音が耳を突き抜け、大我が盛大に舌打ちしながら勢いよく扉を開けた。

「うるっせぇぞパラド！」

「あっ、なんだ、起きてんじゃん」

「お前はエグゼイドの中から入れるだろ……なんでそんな面倒くせぇことしたんだよ」

永夢のウイルスであり、永夢を依代とするパラドは自由に永夢の身体を行き来できる。それでなくてもバグスターウイルス特有のテレポート機能なんてものがあるのだから、チャイム鳴らして玄関から部屋に入る必要性はない。

それこそ今まで幾度となく同じような状況になったが、パラドが態々玄関から入った記憶はそんなにない。

「ひでぇの。オタノシミかなと思って永夢とリンク切ってたんだぜ。さっき繋いでみたけどまだ戻れなかったからこうやって来たのに」

「テレポートすりゃいいだろ」

「朝からオタノシミかもしんねぇじゃん。さすがに嫌だぜ、お前らのそういうとこ見んの」

まぁ、それもそうかと納得する。パラドからすれば親のそういう行為を見てしまうのと同じ感情になるであろうことは簡単に想像ついたのだ。永夢からしてもそうだ。限りなく子供に近い存在で、自分の半身にそういう行為を見られるのはたまったものじゃないはずだ。

そういえばいつぞやに、行為中はパラドとリンクを切っていると言っていたような。大我自身数年前ぽろっと言われただけのためあまり意識したことはなかった。

ただ今回は、そんな行為をする余裕もなく死んだようにこの男は寝こけていたわけだが。リンクが切れたままだったというのなら、それほどまでに深い睡眠に落ちていたということになる。

「あれ、パラド早いな。おはよ」

「おはよう永夢。随分寝坊助さんだったみたいだなぁ」

「最近ちょっと仕事詰め込んじゃってたから……でも今日は一日お休みだ……んへ」

へら、と笑う永夢を見て、息が詰まる。おそらく身内でなければ気付かないほどの違和感。ジィジィと家の外で喚く蝉の音を聞きながら、パラドがぐん、と大我のシャツの裾を掴む。仕草だけでいえば幼い子供と同じだが、図体の大きさや力加減が相まってギリギリとシワが寄っていき、子供のそれと同列にしてはいけないレベルだった。

「……スナイプ」

「あー、まて。わーってる。悪りぃが……」

「いいよ。今日もポッピーと遊んでくるから」

「え？え？」

大我とパラドだけで進んでいく話に、置いてけぼりをくらった永夢が戸惑った。当然だ。本来なら今日は昼から丸一日、永夢はパラドと新作ゲームをする予定だったのだ。

しかし今、パラドはほかの誰かと遊ぶ話に切り替わっており、靴も脱がずに踵を返してどこかへ行こうとする。永夢からすれば急にどうしたのかって思うだろう。

自身の症状に、自覚がなければ。

「お前、熱あるな？」

ぴと、と頬に手の甲をあてる。常から体温は高いはずだが、いつにも増して感じる熱の高さに、思わず溜息がこぼれた。

起こしたときに触れた身体が火照っていたのは寝起きだからだろうと判断していた。しかし眠気もなくなり冷水で顔を洗ったはずの永夢の顔は未だに赤く、心なしかふわついている。極め付けは大我が今触れた頬の熱さだ。

パラドが後腐れなく、じゃあな〜とひらひら手を振り去っていくのを見送り終えてから永夢の腕を掴み寝室へ直行する。

冷麺？確かに冷えたものは食いやすいかもしれないが、味付け的に病人に食わせる飯じゃないだろう。俺の昼飯だ。

「あの、大我さん」

ぼす、とほとんど強制的にベッドに座らせる。サイドテーブルの引き出しから体温計を取り出し永夢に渡した。

「おら熱測れ。身体は？」

「平気です」

「いいか、もう一回聞くぞ。身体は？」

「……関節が痛くて、少しだけ頭がだるい感じします。咳とか喉の痛みは無いし、鼻水も正常だったので風邪じゃないと思うんですけど」

言わんこっちゃねぇ……の、言葉は喉の奥で留めておいた。大我にとって無駄に機嫌を悪くして体調をさらに崩されるのは本望じゃない。

ピピピ、と永夢の腋から音が鳴る。表示を見るやいなや隠そうとする腕ごと掴んで体温計を覗き込む。映し出された数字は、大我からすれば納得できるものだった。

「こんなこったろうと思ったぜ」

「う……」

３８．５度。むしろこんな熱があるのによく頭だるいだのだけで済んでいるものだ。もしかしたら別の症状を隠している可能性も……そこまで考えて頭を振る。パラドが既に帰ったこの状況でこれ以上隠す必要が無い。頭がだるいと言っていたし、そこまで考えてもいないだろう。

サイドテーブルの横に置いてある小型の冷蔵庫から水と冷えピタを出す。

「ちょっとでいいからそれ飲め。で、これ貼って横になってろ。なんか作ってくっから。なにがいい？」

「……ハンバーガー」

「お前なぁ」

「別に喉が痛いわけでもお腹の調子が悪いわけでもないので、ホントになんでもいいんです」

ぺたぺたと冷えピタを額や首元に貼る永夢の様子から、嘘を言っている訳では無いのだろう。それはわかるが、それにしたって発熱してる人間にハンバーガーを食わせる気は、さすがに大我とて起きなかった。そんな考えを持ち合わせているなら、わざわざリクエストを聞かずに冷麺を食べさせていただろう。

ホントになんでもいい……も、本心だろう。

それなら何を作っても文句は言われないな、と冷蔵庫や食器棚の中身を順繰りに思い出していく。

そういえば、ひやむぎがあったような。味の濃い冷麺よりは食いやすいはずだ。わざわざ作ってもらった、とも思わせないぐらい簡単だし(茹でるだけだから)気負わせずにすむ。

そこまで考えて、少しだけ苦笑した。仕方ないことだとは、大我も理解している。ただこれだけ一緒に暮らしているのに、一方的に世話を焼かれることに慣れないものなのだから、幼い頃に根付いたものというのは末恐ろしい。

「たいがさん、ひとつだけお願いが……」

「なんだ」

「プリン食べたいです。大我さんが作ったやつ」

ぱちぱちと、何度か瞬きをする。プリン。もちろん材料的には問題ないが、果たして永夢にふるまったことがあっただろうかと記憶を遡る。少なくとも、大我が覚えている限りでは身に覚えがない。

「いや、市販のものでもいいんですけど……そうなると家にないから大我さん買いに行っちゃうでしょう？風邪かもしれないのにずっと一緒にいてとか、そんなこと言わないので。せめて今日一日ずっと家にいてほしいなぁって……」

熱が上がって寒いのか、照れ隠しなのか。薄いブランケットを頭から被る永夢の手をそっと握り締めた。

ぎゅう、と、心臓が握り締められたような感覚。身体の芯から熱がじわじわと表面へ出ていく。恋人が体調を崩しているというのにこんな感情を抱くのは最低だろうか。でも、それでも。

おそらく数年前なら絶対に聞けなかったであろう永夢の本音と、それになんの違和感もなく応えることができるようになった自分。こんなにもむずがゆく、こんなにも平穏に溢れる愛情に、眉間に皺を寄せ、ぺらりとブランケットを捲る。明らかに発熱以外の理由で赤く染まった頬を撫でた。

「出てかねぇから、全部聞いてやるから、さっさと熱下げろ」

「……じゃあ、一回だけキスしてください。もし風邪だったらいけないから、一度だけ」

う、と口を尖らせて熱に浮かれたようなたどたどしい物言い。病人はおとなしく寝ていろ……という前に勢いよく腕を引かれた。体調が悪い人間とは思えないほどの力で、だ。

ここで何もしなかったら拗ねてしまうのだろう。拗ねて、次こいつが晩飯作るとき変な味付けでもされんだろうな。それはそれで良いと思ってしまう俺が、いないわけではないが。

「エグゼイド」

れ、と舌を出す。ぱぁ、と表情が綻び柔く肉厚な唇に迎え入れられた。

「む、ァ……？」

がじがじと俺の舌を甘噛みして好きなように遊んでいたが、心の中で五秒数え終わるとエグゼイドの耳たぶを弱い力で引っ張る。

「たいがさん」

「一回だけ、だろ」

医者として、お前の恋人として。ここから先の行為を進めることができない。臆病者だろうか。そう思われたってかまわない。ただ永夢だけではなく自分も、今があまりにももどかしいのだと惜しみなく伝えるため、大我はふっと目尻を下げて口角を上げる。

じわじわと、蝉が鳴く。冷房の効いた寝室の窓から覗く日差しの強さを横目に、永夢の頭をなるべく優しく撫でた。